

Report

第74回 OMEPギリシャ大会報告

“We hugged, worked, discussed, planned, and had fun!”

I

世界総会・世界大会報告

上垣内伸子

OMEP日本委員会会長
十文字学園女子大学教授

2022年7月12日～15日までの4日間、長い歴史をもち、今に生きる哲学を生んだ国ギリシャの首都アテネにて、OMEP世界総会・世界大会が開催されました。2019年7月のパナマ大会以来の対面での開催です。日本からの参加会員は12人。この2年間PC画面越しにながっていた懐かしい顔ぶれに出会い、互いの温かみを感じながら直接語り合える喜びに浸りました。

私たちのこの想いを受け取ってか、アテネは開催期間中ずっと青空の上天気、街の中心にそびえるアクロポリスの丘に建つバルテノン神殿を見上げながら、エフィOMEPギリシャ委員会会長の下、ギリシャOMEPの会員と会場となったアテネメトロポリタン大学のスタッフと学生さんたちのホスピタリティを受け、やっぱりOMEPはいいなあと心地よい時間を過ごしました。

世界大会での研究発表の詳しい報告は、ESD世界プロジェクトの日本からの報告と個人での研究発表と、初めてのOMEP世界大会を堪能された木原圭会員に譲り、会長の私からは、代表として出席した世界総会と3日間の世界大会の概要について報告をさせていただきたいと思っています。世界OMEPのホームページには、この第74回世界総会と世界大会の様子が動画で紹介されています。どうぞご覧ください。

<https://omepworld.org/>

1 大会テーマのもつ重み

今大会のテーマは“Early Childhood Education in the 21st century: new perspectives and dilemmas” “21世紀の幼児教育…新たな視点とジレンマ”でした。このテーマを決めた2019年には予想だになかった状況が今世界規模で展開しています。設定当時は、SDGsを中心に乳幼児期からの持続可能な開発のための教育という新たな幼児教育・保育の地平を、気候変動や飢餓など現在社会が抱える問題を踏まえながら見出していこうという趣旨でありました。2020年、2021年とコロナパンデミックによって世界大会開催が延期される中で、難民問題の深刻化、ウクライナへのロシア軍の侵攻が生じ、まさに今、人類が重大な岐路に立たさ

れることとなりました。「新たな視点とジレンマ」は、誰にとっても痛みを伴う現実的かつ喫緊の課題となったわけです。そのような状況で開催された世界総会・大会でしたので、多くの議論が真剣に交わされました。

2 APR地域会議

11日の午後、世界総会開会に先駆けて地域ごとに会議をもちました。アジア太平洋地域（APR）は地域副総裁であるタイのウドムラックさん、オーストラリアのサンディ会長、シンガポールのリリー会長そして私の4人での会議となりました。韓国のスーンハン会長は翌12日にアテネ到着のために欠席、中国、香港はコロナのために出国が制限されており、ニュージーランドやパキスタンなどその他の国も欠席でした。

昨年11月の中国でのAPR以降の、4か国それぞれ（ECEC（幼児教育・保育）の現状と新たな取り組みやトピック、来られなかった各国委員会の状況について情報交換しました。年会費の支払いが困難な委員会、連絡が取れない委員会など、APRのもつ課題解決への糸口がなかなか見出せない状況がありました。APRでは、地球温暖化による気候変動に伴う災害、民族紛争や難民を巡る問題など、SDに向けて挑戦すべき課題が数多くあります。その私たちがAPRの課題を共有し共に前進していくための

場こそが、隔年で開催しているAPR会議です。次期の地域大会開催国であるオーストラリアから、開催日程と場所、大会テーマが示されました。サブテーマには、質の高い保育へアクセス、保育者の雇用問題、若者の健康と幸福を育むコミュニティ、先住民の文化保全と推進、気候変動と環境の持続可能性の5つが挙げられています。京都大会以来の現地開催です。

■ OMEPアジア太平洋地域大会2023

2023年12月6～8日、シドニー開催

大会テーマ：Looking back, moving forward:

Progressing the UN Sustainable Development Goals(SDGs) in the Asia-Pacific region (われまを振り返りつつ未来へと歩み出す…アジア太平洋地域における国連SDGsの進展)

3 世界総会

世界総会の紹介動画のテロップに “We hugged, worked, discussed, planned, and had fun!” とあるとおり、たくさんハグの後に真剣な討議が始まりました。現在、世界OMEPPには63の国と地域の国内委員会と6か国の準備委員会が加盟していますが、そのうち34か国の代表が出席しました。投票には、加えて20の国と地域の国内委員会が参加しました。世界総裁と5人の地域副総裁、ユネスコ、ユニセフのOMEPP代表、会計などの世界理事を含め、45名が会議場



APRと日本からの参加者の集合写真



世界総会参加者の集合写真

の机を囲んで討議を行いました。

メルセデス総裁からは、今期のスローガンである“Rights from the Start: Early Childhood Education and Care for All”が示され、「OMEPは1948年以来変わらぬ子どもの権利を守る活動を始め、幼児教育の振興を図っているが、それは教育を受けることが子ども（私たちすべての人）の権利であり、教育は私たちがすべての権利を実現するためのツールであるからだ。そしてその実現のためには人生の始まりの乳幼児期からの教育が不可欠であり、だからOMEPはSDG42に示される乳幼児期からすべての子どもが質の高い教育にアクセスできることを願って活動していくのだ」と、OMEPの理念と目指すところが語られました。

世界中で子どもたちの状況が危機的である今こそ、子どもの権利のアドボケーター（代弁者）として、国連「幼児教育・保育の10年」(Decade for Early Childhood Education and Care)採択に向けて、各国委員会がその国の状況に応じた戦略をもち、関係団体と連携しながら活動していくことを確認しました。

今年で世界総裁の1期3年の任期が終了するため、総裁選挙が行われ、メルセデスさんが再選されました。世界総裁の他に、任期終了に伴いアジア太平洋と南米の地域副総裁、世界会計の選挙も行われ、APR副総裁にはオーストラリアのサンディ会長、世界会計には韓国のスー

ンハン会長が選出されました。また、新たな準備委員会としてタンザニアとアンゴラの加盟が承認されました。

今回の総会は、OMEPのミッションの再確認と今なすべきことを明確にする場となりました。OMEPは幼児教育の振興を通じて世界平和を実現していくことを願って1948年設立されましたが、「幼児教育からの平和の実現」「子どもの心に平和の種を蒔こう」というOMEPの目的は今もって不変であるばかりか、今こそ世界のOMEP会員が連帯して実現していくものであるとの認識を新たにしました。

最終日に3言語で読み上げられた「総会宣言」には戦争と暴力の停止と平和への対話の緊急要請が示されました。平和なくして持続可能な開発はあり得ず、持続可能な開発なくして平和はあり得ないこと。だからこそ、そのためにOMEPは、世界に向けて対話を通して人生の始まりである乳幼児期からの子どもの権利を最優先して保護していくことを呼びかけようと。危機においてもつとも脆弱である子どもという存在がもつとも価値ある存在となるよう、保育に関わる私たちが行動していくことの意義を感じながらの閉会となりました。

4 世界大会

開会式ではアルファベット順に加盟国のコー



閉会式での総会宣言の読み上げ（世界総裁と5人の地域副総裁）



ホテルの屋上からの風景（アクロポリスの丘のパルテノン神殿と足下のゼウス神殿）

ルがあり、その国からの参加者が起立して歓迎の拍手を受けました。ウクライナのコールでは誰も立ち上がる人はいませんでした。拍手が鳴り止みませんでした。ロシアのコールには1人の参加者が立ち上がりました。私たちは彼女にも拍手を送りました。開会式の最後にジョン・レノンのイマジンを、歌詞をかみしめながら皆で歌い、世界大会が始まりました。

3日間の世界大会では8つの基調講演、18のシンポジウム、193の口頭発表、43のポスター発表がなされ、日本からはESDとWASHプロジェクトのシンポジウムでの報告、そして参加者それぞれが研究発表を行いました。直接の質疑応答はやはり格別で、その後の研究に関する情報交換や共同研究の提案、帰国後のZoomの共同シンポジウムの企画など、交流が広がりました。これこそが各国の保育者が集うOME P世界大会の醍醐味です。こうして私たちは再会を約束して帰国の途にいたしました。

恒例のGala Dinnerはゼウス神殿の遺跡脇の野外会場。世界無形文化遺産にも登録されているヘルシーな地中海料理を味わい、郷愁を誘うメロディに乗せたギリシャの民族舞踊を楽しみ、友情を深める時間となりました。

キコゴ、"We hugged, worked, discussed, planned, and had fun!"のギリシャ大会でした。来年は残念ながらオンライン開催に戻りますが、2024年はコロナ前からウドムラック会長の下、

タイのOME P会員が準備してきたバンコクでの開催です。アジアでの世界大会にどうぞご参加ください。

II

OME P世界大会に初めて参加して(前編)

— 幼児教育のオリンピック

木原圭

全私保連青年会議総務部副部長、
京都市・おいけあした保育園園長

KALININ & DAI (カリメーラ!) 第74回 OME P世界大会に運よく参加できました私が、コロナ禍での海外渡航から大会参加、そして日本帰国までを2回に分けてレポートいたします。

小さな好奇心は行動に向かう大きな力をくれることがあります。

子どもの頃はまだ見ぬクワガタを探しに友と一緒に藪をかき分け森に行き、図鑑で見た輝く魚を釣るために川を巡りました。その後、美大生になって日本社会に疑問を持った時、まった

く考え方の違う世界に身を置いてみたいと、メキシコの美術大学に留学しました。日本とは違う生活様式、習慣、考え方、気候、食べ物、3年半という短い期間でしたが、その後の自分の人生と思考にメキシコは大きな影響を与えてくれました。

単純に、知らないことを知りたい、見たことのないものを見てみたい、この手で触ってみたい、写真ではわからない何かを感じたい、自分の心の底の方には、知らない世界にふれてみたいという好奇心と根源的な欲求があるようで、それは40代の今も変わらず、生物や植物をたくさん育てています。

今回の好奇心の源流は、我々が日々『保育』と称し行っていることが世界の人にどのよう映るのだろうかというものです。そのきっかけは、2019年に私の地元京都で開かれたOME Pアジア大会で、世界のさまざまな幼児教育の実践や研究発表から、現在世界で起こっている子どもの問題を肌で感じることできたり、遠い国のまったく環境の違った保育者の発表から、保育観に深く共感したり、参加したことによって今までに見ていた視野が一気に世界へと広がり、さまざまなことを世界レベルで俯瞰して考えるきっかけとなったからです。

世界中から研究者や現場の先生たちが日々行っていることを発表し合う場は、まさに幼児

教育のオリンピックで、それは誰でも参加できません。そのようにして世界の人たちに刺激を受けた経験があったので、今度は自分も世界の人たちに発信したいと考え、応募に至りました。

そしてコロナ禍で2度の延期を経て、今年7月によくギリシヤ大会が開かれることとなりました。今回我々が応募した実践は、子どもたちとやりたいことを一から考え行った自園での『お泊まり保育』についてで、コロナ禍の行動制限がかかる中でどのように外の世界とつながりながら行ったかという実践でした。

一昨年に応募したところ幸いにも今大会での口頭発表の機会をいただき、なかなか海外には出にくいご時世ですが、ヨーロッパでの行動制限は解除されつつあったので、またない機会であり自園のお泊まり保育を世界の人たちと共有し議論したいと考え、ギリシヤに渡りました。

また今回のもう一つの目的は、世界OME Pのプロジェクトとして取り組んでいるESDの実践度を測る指標としての“Rating Scale”に関して、各国からのその進捗状況や実践を報告をするシンポジウムにも参加することです。ここではOME P日本委員会としての進捗状況の報告と自園でのScale 活用の実践を報告するところの予定です。(ESD = Education for Sustainable Development : SDGs 4,7 参照)

久しぶりに訪れた夜の関西国際空港は、コロナ禍で仕事や留学でしか海外に行く人がいないのでがらんとしていて、日常生活から切り離されたような無機質な時間が流れていました。まばらにだけ電気がついていて、談笑する人もいなくて、冷やりとした空港の空気がいつもに増して冷たく、閑散としたグレーな世界が広がっていました。そんないつもと違う空気の中で乗る飛行機は、深夜の11時55分に関西から經由地ドバイに向けて静かに飛び立ちました。

現在ロシア上空を通れないため、南回りに飛んだ飛行機は上海から武漢上空を通り、コルカタからドバイを経由し、広大な砂漠が広がるアラビア半島を縦断し、ベイルートとエルサレムの間を通って紺青のエーゲ海に入った後、ギリシヤ神話の神々の島を抜けて人類叡智の始まりの地ギリシヤ・アテネへと舞い降ります。現代史主要都市を通りその行き着く先が5000年の歴史を誇るギリシヤであったので、さながら時空を遡る旅程のようでした。

空港に着いて驚いたのは先ほどの日本の空港との熱気の差です。そこはヨーロッパ各国のパケーション客でごった返っていて、マスクをしている人もまばらです。大声で騒いでいる家族連れ、猫を肩にのせている旅行者など、皆日焼けをして幸福感に満ちた人々ばかりで、そこに東洋人の姿は一切ありません。6月よりギリシヤの入国制限はすべて解除されたので、私は



至るところで出会う“時を経た建造物”



国旗と国名の紹介とともに挨拶が続く世界大会開催式

ワクチン3回接種済みでしたが、入国審査でコロナ関連の審査や書類を見せることは一度もなく、一言も質問をされることなく入国が完了しました。

ギリシャ滞在中にもコロナ関連のニュースがないかと見ていたのですが、その頃からヨーロッパに到来していた熱波のこととウクライナ情勢がメインで、私が見た限りでは日本のようなコロナの報道はありませんでした。ただし、レストランなどの飲食店店員、病院や公共交通機関などの乗り物の中はもちろんマスク必須です。

未知の病気ということで日本では連日感染者数の記録更新などとネガティブな報道がたくさんされていて、コロナは精神面にも暗い影を落としています。国が違えばこれだけのもの捉え方が違うのかと愕然としました。

コロナ禍直前の2019年に自園で体や病気に関して興味を持っていた子どももがいて、免疫学の研究所にお邪魔したことがありました。その時、先生はお話の中で強い体を作るにはNK細胞を活性化する(ストレスなく過ごす)ことだとアドバイスをくださったことがあり、そして今アテネの空港でそんなお手本のような人たちが空港に溢れかえっていたので、日本との違いに心の中で小さくないざわめきが生まれていたのも正直なところでした。

アテネに到着しての第一印象は、青い空、廣大で背の低いオリブ畑と白い山です(後でわかったのですが、ギリシャの山の白さは大理石の白さで、至る所にそんな山があり、何千年も前から石を切り出して彫刻にしたり建材にしてもまだまだそんな山があります)。そして街中は6階程度の中規模マンションが建ち並び、そこには必ずバルコニーがあつて、日本とは違い乾燥した夏の地中海性気候の鋭い日差しを遮るためかオーニングがあつています。また街中の至る所に落書きがあつたり、シャッターを下ろした建物も多く、ギリシャ経済危機の影響を感じさせられます。

路地には路上駐車も多く、その中にデザインされた不思議な魅力のギリシャ語看板があり、さまざまな要素が入り混じった雑多な様相なのですが、そこに突如歴史の教科書に出てきた2000年以上の時を経た建造物が悠然と現れて、遠い昔に勉強した記憶を遡ることになります。例えば、アレクサンドロス、ハドリアヌス、ゼウス、トロイ、エンタシス、コリント等、何か聞き覚えがありませんか？

そんな歴史と新しいものが入り混じった街のタクシーは、なぜかカーチェイスのように高速で街を走り抜けるので、それはさながら007の映画の中にもいるような、そんな雰囲気のある街でした。ギリシャ経済の大変さと、爽やかな青空に映えるブルーの国旗とのギャップに壮大



発表風景。子どもたち手作りのギターを使って園の紹介



OMEP世界総裁メルセデスさんと筆者

な歴史の厚みがある地中海の不思議な魅力溢れる街、アテネです。

ギリシャ大会のメイン会場はゼウス神殿のすぐ隣、目の前にバルテノン神殿を望むホテルで、そんな歴史の荘厳さを毎日感じながらの大会でした。

世界34か国から集まった今大会で、開会式では参加者の国旗とともに国名が読み上げられ、そのタイミングで各国の出席者は会場で立ち上がり挨拶をしていくので、まさにオリンピックのように世界の舞台にきたことを実感します。

今回の大会でいただいた発表の機会は、EDUCATIONAL CHANGE, INNOVATION, RESEARCH AND DEVELOPMENT (教育における改革、研究と開発) という分科会でした。そこではギリシャのイオニア大学の『幼児期における科学概念の発達をどうやって行うのか』と、カナダのモントリオール大学の『ケベックの保育園でコロナ禍はどのように教育の質に影響したか』という研究発表とともに、我々保育園からの発表をしました。タイトルは、次のとおりです。

“SENSE OF WONDER AT OUR FEET”

How do we connect to the world, to search new-way of ECEC with Covid19 ~An example of the Oikashita Japanese nursery school's summer camp.

■足元のセンスオブワンダー

コロナ禍でいかに世界とつながるか、幼児期の擁護と教育の新しい形を探る試み

— おいけあした保育園のお泊まり保育の実践 —
私どもの保育園で行っている年長児約30名が7月に参加する1泊2日のお泊まり保育は、毎年行き先が決まっています。園で泊まることだけ決まっています、行き先や2日間の予定はすべて子どもが決めます。

年長組になった4月から子どもたちは担任とお泊まり保育でどこに行きたいか、その2日間何がしたいのか、4か月間かけてじっくり話し合います。子どもの主体性を一番に考えているので、日中の活動では子どもたちが考えたアイデアから3〜4つのチームに分かれ、それぞれが決めた行き先でやりたいことを行います。大好きな生物を探りにいきたいとか、憧れている職業の現場を見てみたいとか、普段不思議に思っていることをもっと知るために専門家に会いにいききたいなど、やりたい事に関していろいろな意見が出るので、担任と一緒にそれらの夢を実現するために具体的に何ができるか話し合います。

園で10年ほど前から行っているこの活動での行き先は山や川、博物館や科学館、空港、大学の研究室、などなどその年によってさまざまです。一度ハワイに行きたいと言った子がいて、なんともその発想がおもしろいのでぜひ取り入

れようと、その年の自分たちが決めた昼間の活動からそれぞれのチームが夕方園に帰ってくる、保育園がハワイのホテルに様変わりしていたという年もありました。職員皆がアロハシャツを着て、夕食会場にはシャンパン(りんごジュース)タワーがあり、ディナーショーを企画して、最後は満月の夜にウクレレの音楽を聴きながらフラワーバス(温水を張ったプール)に入り、皆でハワイに行った気分になりました。

そんな子どもたちの夢の実現をテーマにした当園のお泊まり保育ですが、2020年はコロナ禍でなかなか外出が厳しくなり、そんな現状でどのようにやっていくか、子どもたちと担任との話し合いが始まりました(世界大会の会場で聞きましたが、多くの国で実施されたロックダウンで、就学前の施設も完全に何か月も閉鎖していたところがほとんどでした)。

そしてその年は感染リスクの高まる外出は避け、普段の日常生活の範囲内で何か新しいことができないかと子どもたちと知恵を絞り、4か月の議論の末に生まれたチームは3つ『世界部』『宇宙部』『自然部』です。

まず外国に興味のある子どもたちが集まった『世界部』ができました。地球儀や国旗から世界の国々に興味を持っている子どもたちです。お泊まり保育当日は私自身や職員の友だちをたどり、メキシコ、アメリカ、ニュージーランド、オランダ、

香港、シンガポールと時差を計算して約1時間ごとにZoomでつなぎ、現地の人にインタビューをしました。まずは各国の現在時間、気温、季節などを聞くところから始まるのですが、当然ながら「え？夜なん？」という子どもたちの反応がありました。そしてその国の有名なもの、美味しいもの、文化、そして最後に今のコロナの状況を聞きました。事前にインタビューをお願いしていたので、それぞれの国で趣向を凝らしたプレゼンテーションをしてもらい、子どもたちも大人も1日で世界旅行をした気分になりました。

次に星座や天体観測、ロケットや宇宙ステーションなどに興味のある子たちが集まった『宇宙部』です。たまたま職員の知り合いの宇宙工学の大学の先生とZoomでつながせていただきました。宇宙に関する素朴な疑問、例えばロケットはなぜ飛ぶことができるのか、宇宙空間での生活について、またトイレはどうやってするのか、などなど、さまざまに不思議に思っていたことを直接大学の先生に質問をし、わかりやすく答えていただきました。

そして、いろいろな質問に答えていただき、夜には保育園屋上の8階に上がって実際に天体観測をしました。生憎の曇り空でなかなかはっきりと観測するまでには至りませんでした。雲の裏側に広がる宇宙空間に、大学の先生から教わった知識もプラスして壮大な宇宙に想いを

馳せた夜となりました。

最後は虫や魚などが大好きで興味のある子たちが集まった『自然部』です。普段使っている園庭にどれだけ生き物がいるのか、身近な場所での生き物調査をしました。

当園は京都市の街中に位置しており、高い建物の隙間の土地に15m×15m程の狭い園庭しかありません。街中の園なので開園当初から自然を感じることでできる生物多様性に富んだ園庭にしようとして常にその環境の見直しをしてきています。植樹をしたり自然の山のように凹凸を作ったり、開園当初はフラットな園庭も今では小さな森のようになってきていて、そうやって環境さえ作ることができれば、周囲の自然とつながることができ、さまざまな昆虫や動物が来るようになります。今では15年経ち、益々生物多様性の度合いが深まってきました。近隣から捕まえてきたイモリやカエルなどが最初の定住者でしたが、ヤゴやハナムグリ、バッタ、カマキリなど定住してきている生き物もたくさんいます。彼らの世話は一切しておらず、自然な形で生態系ができています。

そんな園庭で子どもたちの人気スポットはビオトープで、深いところで20cmほどのものですが、水場ですので普段はその中に入ることをしていません。ただ、多くの草が生え底の見えないビオトープには何かがいるのではないかと子どもたちの想像力を掻き立てるようです。ここ

が常に子どもの人気スポットで『自然部』のメインイベントがこの場所の調査となりました。

普段入れないビオトープに入れるということ。子どもたちは大興奮で、メダカにカエル、タニシにアメンボなど、また普段はあまり見えないコオイムシ、アカハライモリ、オニヤンマを含む多様なヤゴ、そして、園庭にて先月産まれていたニホンイシガメの子どもまで発見することができました。

それらを捕まえ記録し、小さなものは顕微鏡で見て、身近な自然の不思議に一日中浸った子どもたちでした。

そして後日カウントしたのですが、保育園には78種類もの生物がいたのです。普段感じているよりはるかに多く生き物が住んでおり、同時に園庭はわれわれ人間だけが使っているのではなく、生物たちの生活の場でもあると実感しました。

「コロナ禍で制限ができたことで、日常を改めて見直すきっかけとなり、そこには普段気づいていない子どもも大人も驚くようなことがたくさんありました。『何気ない日常であっても足をよく見れば驚きに溢れている』そんなことを考えました」という発表でした。

さて、この発表の後、世界の方々の反応はどうだったでしょう。次号に続きます。